正道の系譜

ぎゃぎゃす子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正道の系譜

【Ｎコード】
Ｎ２３６９ＢＡ

【作者名】
ぎゃぎゃす子

【あらすじ】
秋月直樹を主人公とした、とても長い話になります。
裏世界やちょこっと恋愛、普通の友情等いろいろ…。
後々残酷な描写も入るかと思います。お気を付け下さい。

某所で連載していたものを加筆・修正したものです。
フィクションでもノンフィクションでも、お好みでどうぞ。
気の長い方、お暇な方、どうぞお付き合い下さい。

正道の系譜（前書き）

少し残酷な描写が入りますので、お気を付け下さい。
フィクションでもノンフィクションでも、お好みで読んでいただければと思います。
長い話ですので、気の長い方やお暇な方、どうぞお付き合い下さい。

正道の系譜

この少年は、この地に引っ越してきて今日で５日目。
５日前までは東京で暮らしていたが、両親の仕事の都合でこの関西に移り住むことになった。

１４歳のこの少年は、身長がすでに１８０センチほどある。
ちんちくりんの詰襟の学生服を一番上まで留めて、眼鏡を掛け、ぴっちり横分けのヘアスタイル。

彼の名前は、秋月直樹。

直樹は東京在住の頃、とても偏差値の高い中学に通っていた。
関西に移り住むことになり、学校のランクが落ちたような気がしていたが、彼にはさほど問題はない。
強いて言うならば、この賑やかな街が肌に合わないかもしれない。
５日目でそれくらいの判断をする程度。
要するに、完璧なほどにスクエアなステップを踏みしめる直樹には、それほど問題ではないということだ。

その日家に帰ると、珍しく父親がいた。
「ただいま帰りました。お父さん」
「…うむ」
直樹は幼い頃からこの父が「ああ「うむ」、経営論、教育論以外を口にしているところを見たことがない。

この家での直樹の立場。

「お父さん」と呼んだこの父は、実の父親ではない。
母も。

直樹は3歳の頃、この家に貰われてきた。
父親が経営する不動産・建築関係の会社、これを継ぐべくこの家にやってきたのだ。

義理の父、義理の母というものが本来、養子に対してどのような教育をするのか直樹は知らない。
しかし彼らを『本当の父と母』、そのように思い、この会社を継ぐべく、両親の財力をフルに活用した教育方針・教育理念を一手に引き受け、この家で過ごしている。

この日は珍しく、父も一緒に夕食の席に着いた。

「直樹、今度の学校はどうだ」
そう問う父に対し、
「何の問題もありません」
そう答える直樹。

父の事情は分かっている。
父の会社は今回、この関西に足場を固めるべく進出した。
部下に任せるのではなく、自らがこの進出に関わるということがどれだけ社運を賭けてのものなのか。
それを考えれば、賑やかさが合わない、言葉が合わない、学校のランクが少し落ちた、などということは直樹にとっては本当に、何の問題もないことなのだ。

母も直樹に言う。
「何か不満があるなら、前の学校に戻ってもいいのよ」

「いえ、大丈夫です。お母さん」

母とする会話はいつもこのようなもので、後付けされるようなものばかり。
それも直樹にとっては、何の問題もない。

お手伝いさんが食事の用意を済ませ、３人で食事をしていると玄関からバタバタと音がした。
バタンッ！と勢いよくドアを開けて入ってきたのは、ドロだらけの弟の慶也。
直樹の３つ年下の弟だ。
慶也は、直樹がこの家に来た翌年に生まれた、両親にとっては本当の息子。

彼は関西に来てすぐにリトルリーグに入り、毎日毎日野球の練習に明け暮れている。
勉強の方はというとそれほど悪くはないのだが、父の設けている高さには到底追いつけない位置にいた。

食堂に入ってきた慶也は父を見て、ハッとして俯いた。
今日も父はいないものと思い込んでいたのだろう。

「慶也！お前はいつまでそんな下らんことをやっとるんだ！？そんな時間があるなら、塾にでも行きなさい。
野球みたいなものが、将来身を結ぶと思っているのか？
私の息子がクズでは面目が立たんのだぞ！？」
こういった言葉も、直樹は聞き慣れている。

しょんぼりとした慶也に母が駆け寄り、
「さ、ごはんがあるから着替えてきなさい」

その遣り取りを横目に、直樹はさっさと食事を済ませ、
「それではお父さん、勉強がありますので失礼します」
「…うむ」

そうして、直樹は2階の自分の部屋へと入っていくのだ。

自室に入ると、直樹にはまずやることがある。
学習机の鍵の掛けられた引き出しを開けて取り出したのは、1冊のノート。
その表紙に書かれているのは、

『正道の系譜』

……僕は本当の両親や祖父、祖母を知らない。
だけど、僕にも間違いなく親はいた。
そこから受け継がれているものが、必ずあるはず。

そう思い、書き始めたこのノート。
日々あったことなどを、書き連ねている。

――――――　『お父さん』『お母さん』
この家はとても裕福です。
きっとこれも、お2人から継承された運なんでしょう。

まだ見ぬお2人のため、僕は一歩一歩駆け上がります。
見ていてください。
そしておじい様、おばあ様にも、見事に成し遂げる僕の成功を自慢してください。

僕はやってみせます。――――――

切欠　1

直樹は知っていると言う。
この世の中はフルイのようになっている、と。
このフルイは下に落ちてはいけないもの。
残ってナンボのもの。
一歩外に出れば、上下左右へとフルイにかけられる。
細すぎれば落ちてしまう。
太りすぎれば潰される。
必ず枠の中に残り、行く末は枠になってみせる、と。

その日も直樹はいつものように、夜中の1時までずっと勉強をしていた。
睡眠時間も大事だと信じている直樹は、必ず6時間は眠るようにしている。
朝7時に起きる彼にとっては、ギリギリの時間。
時計を見、そろそろ寝ようかとベッドに入り掛けたが、その前に水を一杯飲もうと自室を出て台所に向かう。
その途中、父母の寝室から聞こえてきた、声。
「……いいですか、あなた。慶也が本当の息子なんですよ？あの子にはもっと頑張ってもらわなきゃいけないじゃないですか。

今はのびのびと野球をやらせていますけど、後々はもっと頑張らせます。
だからあの子にも、もっと目を向けてやってください」
「…分かっているが…どうしても要領の良い直樹にばかり目が行ってしまうんだ。
慶也に頑張ってもらわないといかんのは、私も分かっている」

「……」

直樹がこの会話を耳にしたのは、これが初めてではない。
そして、その度に思う。

……僕が一番、分かっています。

今の慶也は直樹にとってダークホースでしかないが、少しの違いで一番のライバルになる。

……競争だろ。
分かってるよ。

しかし直樹にとって、慶也は本当に可愛い弟でもあるのだ。

直樹はそっとその場を離れ、台所には向かわずに自室へと引き返した。

……何の問題もない。
僕が、頑張り続ければいい。

音を立てないようにドアを閉め、布団に潜り込んで息を潜め、……

そして思い出す。

そういえば前にアレを聞いたときも、なかなか寝付けなかったなぁ…。

その夜、直樹は最後に3時過ぎを指した時計を見て、眠りに就いた。

この街に移り住み、もう一月が経とうとしている。

一月もあれば慣れるだろうと思っていた街。

しかしその風に、直樹はまだ吹き晒されたまま。

転校先のこの学校は、さすがに進学校。

授業中は水を打ったような静けさで、教師の声と鉛筆を走らせる音のみが耳に入ってくる。

しかしあの、休憩時間の賑やかさ。

みんなの声のデカさ。

登下校の騒ぎっぷり。

これに、直樹はいまだについて行けずにいるのだ。

ギャーギャーギャーギャーとデカイ声で……

そんなことを思いながら登校している直樹の横を、5～6人の集団が追い越し、駆け抜けて行く。

「オイッ！何やっとんねん！！早よぅ来い！

俺らより教室に入るのが遅かったら、ケツキックやぞ！！」

振り返ると、すぐ後ろから何人分ものカバンを持たされた同じ学校の生徒が、ヒイヒイ言いながら走って来た。
それを見て直樹は眉を顰める。

何だ、イジメか？
この学校にもやっぱりあるのか。
…みんな、ヒマでいいね。

こんな時間のロスに付き合わされないようにしないと。
こっちで暮らすのも2～3年の辛抱だろうから。

直樹は標的になっているその彼が、自分のクラスメイトであることも知らない。
他人には全くと言っていいほど興味がないのだ。

と、その時。
直樹の背をバンッ！と叩いて追い越していく人がいた。

「！？」

驚いて顔を見ると、同じクラスの女子。
名前は、久保紀子。

「秋月くん、おはよう！」

彼女は昨日行われた席替えで、直樹の前の席になった子。

「あ、おはよう……」

そう答えながら、何かと自分に話しかけてくる彼女を直樹は密かに

苦手と思い、要注意人物だと自分のリストに載せている。

教室に入ると、直樹は自分の机の上にカバンが置かれていることに気付いた。

「あー、ゴメン。今どけるね」

そのカバンは紀子のもの。

彼女はまた笑顔で直樹に話しかけてきた。

「ねぇねぇ秋月くん。『ひょうきん族』　見てる？」

テレビを全く見ない直樹は、紀子が何を言っているのかサッパリ分からない。

…ひょうきん族？

何だ？　暴走族の一種か？

そんなことを考えている。

「アレ？ひょっとして見てないん？私なんか早々にドリフからひょうきん族に乗り換えたんやでぇ。

ブラックデビルがさんまやない時から、高田純次の時から見てねんで！」

「？？？」

直樹は彼女の言葉がサッパリ理解できない。

「……えっと……今、人と悪魔と魚が出てきたことは分かった。

マンガかな？」

そう聞き返す直樹。

「え～～～～～ッ！！マンガとちゃうよ！
土曜の8時からやってんねんで！見てみなよ。
マンガって！」
ちょっと考え、紀子は続けて、
「秋月くん、マンガとか見るの？」
「……マンガを見る？
本屋で置いてあるのを見たことはあるよ」

直樹はこの地方の『見る』＝『読む』の意味がイマイチつかめていない。

紀子はそんな直樹に、
「あ、そうや！」
と言って、カバンをガサゴソし始めた。
「さっき返ってきたから、コレ貸したげるよ」

直樹の机に置かれたのは　『ナイン』　というマンガ本。

「コレ全5巻やねん。マンガとか読まへんのやったら、手頃な冊数やろ。
結構面白いから読んでみて」
「……」

されるがままの直樹。

え――…そんな時間ねぇよ…。

そう思いつつ、言い返せない。

世間はやはり、広い。

そう思った。

切欠　2

直樹はマンガを手に取り、表紙から裏表紙へぐるりと眺めてみた。
マンガなんて、子供の頃に隠れて読んだ『ドラえもん』以来だ……。
そのマンガはどうやら野球マンガのよう。
直樹は帰り道、本屋で参考書を買うついでに、『野球入門編』という本も買ってみた。
何しろ野球のルールなんて全く知らないのだ。
家に帰ると早速部屋に閉じこもり『野球入門編』を素早く読み、ルールを頭に入れる。
それから、紀子に借りたマンガを読んでみる。

「……」

そのマンガは、中学まで陸上・柔道のエキスパートだった2人が、高校で野球部に入り、甲子園を目指すという話だった。
最初はナナメ読みくらいにしよう、そう思っていた直樹。
しかし自分でも信じられないくらいに、のめり込む。
ほぼ初めて読むマンガに、夢中になってしまう。
あっと言う間に、一気に5冊全部を読み切ってしまった。
切なくもあるその青春ストーリーに、直樹は今までにない感動を覚えた。
その日の勉強は、終始何となくフワフワとした気分。
直樹はそれを早めに切り上げ、もう一度マンガを全て読んでから、

その日眠りに就いた。

次の日、直樹は朝一番にそのマンガを紀子に返した。

「あ、これ、ありがとう」

「早ッ！　もう読み終わったん？　急がんでいいのに。どうやった？　感想は」

え！　と思う直樹。

「感想文、書いた方がいいの？」

その返事を聞いて、笑い転げる紀子。

何か間違えた、と気付いた直樹は、

くそー……人と接するのには、僕にはちょっと限界があるな……

などと思っている。

「感想文なんかいらないよ。面白かった？」

「うん、面白かった」

いつになく、大きめの弾んだ声で返事をする。

「私、マンガいっぱい持ってるから、面白いの貸したげるよ」

「あ、ありがとう」

本当にありがたいと思っているが、あまり貸してもらって時間を取られるのも堪らないなぁと、冷静に思う直樹もいる。

と、その時、紀子はイキナリ立ち上がり、

「秋月くん、ちょっと立ってみて」

直樹は言われるまま、立ち上がった。
紀子はそんな直樹の正面にピタッとくっつくように立ち、自分の頭頂部に手を当てて、
「ねぇ秋月くん、身長何センチあるの？」
「えっと……、こないだ測ったときは確か、１８０だったかな」
「え！！　そんだけ身長あるんやったら、バレー部に入りなよ！
私の家ってね、そこの通りの商店街にあるスポーツ用品店やってんねんよ。
親が何か運動せなアカン言うてね。私、バレー部なんやわ。
秋月くんもやりなよ」

直樹はこういう意見に対しては、いつでも意見を持ち合わせている。
僕には、娯楽に費やす時間などない。

そう答えようとすると、紀子が続けて言った。
「今日は土曜日だから、２時から体育館で練習してるから。
一回見においで。
そんだけ身長があったら、何かやらなアカンよ」
「いや、いや、僕は…」
と言い掛けた時、がらりとドアが開き、担任が教室に入ってきた。

「……」
断りきれなかった直樹。

自分の席の前に座る紀子をじーっと見ながら、
この子は一体何のためにこんな進学校へ通ってるんだ？
成績の方もさぞかし……

巻き込まれちゃダメだ。

そんなことを考えていると、担任の教師が皆を見回しながら大声を張り上げた。
「こないだの実力テストの結果を配るぞー。
自分が何番なのか、今どの辺りにいるのがちゃんと確認せぇよー」

それは直樹が待っていた瞬間。
前の学校では常に1番だった直樹。
この学校での自分がどんなものなのか、早く知りたい。

配られたその用紙には、学年全員の点数のみが表になって高い順に並べられていた。
右上には自分の名前と点数。
生徒たちはこの自分の点数と、表の点数を見比べ、自分の順位を知る。

直樹はまず、表の1番上を見てみる。
そして自分の点数と見比べてみる。
直樹は学年で1番だ。

それを確認した直樹はホッとした。
それから冷静に、2番の点数を見てみる。

しかしその点数を見て、直樹はギョッとした。
自分とたったの5点差で、2番についている人間がいるのだ。

……嘘だろ。
あのテスト、結構難しかったぞ!?
くっそー!どこのどいつだ!?

この学校、侮れねぇ。

そんな直樹の耳に、前から同じように「くっそー！」と言う声が聞こえてきた。
その声の持ち主である紀子がバッと振り返り、
「ねぇ秋月くん、何番？」

直樹はまだ動揺しつつ、一番だったからまぁいいか、と紀子に自分の用紙を見せる。
すると、紀子から信じられない言葉が。

「あ！私を抜いたの秋月くんやね！くっそー！ずっと1番やったのに！！
次は負けへんよ！」
そう言って紀子はニコッと笑った。
「……」

……何言ってんだ、この子。

そう思いながら、紀子の用紙を奪い取りその点数を見てみると。
「！！」

『成績の方もさぞかし……』
つい先ほどそう思った彼女が、自分と5点差で2位につけている。
驚いた直樹は思わずガタッと席を立ち上がり、紀子の顔を凝視してしまった。

机上での勝機に危機を感じる前に、
マンガ本をやたらと所有し、クラブ活動までしているこの子が、僕と5点差…！？

直樹の心臓はドキドキしている。
直樹はこのドキドキが、自分の戦々恐々とした心境だと思い込んでいるのだ。

そして彼はこの時初めて、紀子が振り返るたびに髪からイイ匂いがすることに気が付いた。

この日は土曜日。
学校の授業は午前中のみ。

直樹の土曜日の昼は本来なら勉強浸け。そしてそうしなければならないのが直樹のルール。
しかし、この日は昼食を済ませると急いで本屋に駆け込む。
そして購入したのは『バレーボール入門編』
直樹は店を出るとすぐに包装を破り、その場でバレーのルールを頭に入れる。

自分自身、今何をしているのか分かっておらず、そしてそのことに気付いてもいない。
気の向くままに身を任せている、それだけ。

その足で向かった先は、紀子に言われた学校の体育館だ。
中からは大きな声やボールの音がひっきりなしに聞こえてくる。
入口からそっと覗いてみるとそこではバスケ部、バレー部、卓球部が練習しているのが見えた。

バレー部の方を見渡し、集団の中に紀子を見つけた直樹はその場に

立ち尽くし、ただただ紀子のことを見つめている。
今話しかけたら、怒られるよな…
そう思い、タイミングを見計らっている。
1時間ほど経った頃、バレー部員たちが休憩に入った。
今だ！と思い、紀子の元へ駆け寄ろうとした直樹は、しかしその視界に入ってきた光景に足を止める。
紀子が男子バレー部員と仲良く談笑しているのが目に入ったから。
「……」
ここで、直樹はようやくいつもの自分を取り戻した。
……アレ？
僕は一体何をしているんだろう。
何をしようとしてんだ？
そしておもむろに向きを変え、体育館を後にする。
……チクショウ。
一体何時間ソンしたんだ！？
クソッ！
やっぱり世間は、やたらと広い！
そう考えつつ、モヤモヤとする自分の心境を振り払うように家へと帰る。

遅ればせながらやってきた、本来の土曜の午後。
机に向かい、己を取り戻したと信じ切っている直樹は、自分が何故今、不貞腐れているのか分からないまま。

パキン

ポキッ

シャーペンの芯が、やけに折れる。

何でこんなにイライラしてるんだよ？
あー、もう！

教科を変えれば多少気分も変わるだろうと本棚に手を伸ばした時、背後からノックの音がした。
「はい」

直後部屋の中へ飛び込んできたのは、弟の慶也。
「兄さん！コレ見て、コレ見て！！」

慶也がバッと広げて見せたのは、背番号が付いた野球のユニフォーム。
大きく『5』と書かれた、ユニフォーム。

「兄さん！入ってすぐにレギュラー番号もらっちゃったよ！スゴイでしょ！！」
喜び、飛び跳ねるように喋る慶也に、直樹は笑顔で答える。
「おー！スゴイじゃんか！」

そして頭の中を駆け巡らせる。
先日、野球入門の本を読んだばかりだ。

5番ってことは、

1、ピッチャー
2、キャッチャー
3、ファースト

……

「サードだ！サードだろう！？」
そう言った直樹に、慶也は大喜びで
「そう！サード！！」
そう叫ぶ。

「スゲェな。入ってそんなに経ってないのに、もうレギュラーって。頑張ったな！」
すると飛び跳ねるのを止めた慶也は、肩を落として俯いた。
「……でもね、入って間もない僕がレギュラー取っちゃって、前のレギュラーの高橋くん、怒ってるんじゃないのかな…。嫌われたらヤダな……」

それに対し、直樹は即座に返事をする。

「いいか、慶也。そんな気持ちでいるのなら、自分からレギュラーを外してくれって言いなさい。
野球っていうのは9人でやるスポーツだろう。チームプレーが一番大事なんだよ。（↑『野球入門編』で得た知識）
その高橋くんだって、次はきっと慶也より上に行くよう頑張ってく

るんだよ。
慶也がそんなことを考えていたら、必死で競争した高橋くんにも失礼だろう？
胸を張って、堂々と試合に臨みなさい。
今の慶也にできることは、高橋くんを気遣うことじゃない。全力でチームのためにプレーすることだろ？」

直樹の言葉に、慶也はこくんと頷いた。

「うん、分かった。
レギュラーになったご褒美に、お母さんがグローブも買ってくれるって言ったんだ。
僕、頑張るよ」
「うん、それが一番だ」

慶也はにこっと笑うと、そのまま部屋を飛び出して行った。

「……」

今まで慶也に対して、何度かこういうことを言ったことのある直樹。
この後、必ず鬱になる。

……協調性。
それを問われたとき、僕なんかより慶也の方が断然高いレベルで生きている。
僕が言っていることは、全て本で得た知識。

父は直樹に諭すように教え込む。
友など必要ない、と。

…友など、必要ない、と。
しかし直樹は思うのだ。
友人というのは、一生の宝でもあると言いますよ。
……お父さん。

「……」

こうやって、いつも1時間は頭を抱え込んだまま。
やがてハッと気付いて時計を見ると、すでに時刻は8時前。
その針を見て直樹は思い出した。

……そういえば、久保さんが8時からテレビ見ろって言ってたな。

直樹は悩むのを止めて立ち上がり、そっと階下へと降りていく。
父がいないことを確認し、リビングに行くと、慶也がすでにテレビの真ん前を陣取っていた。

「アレ？兄さんテレビ見るの？」
「あー、イヤー、ちょっとー…うーん……ちょっとね……」
要領を得ない答えを返した直樹に、慶也は、
「兄さんも一緒にコレ見ようよ。めちゃくちゃ面白いよ」
テレビの画面を見ると、番組のタイトルが出ている。
『オレたちひょうきん族』
あ、コレだ。

直樹はソファに座り、慶也と一緒にその番組を見始めた。
そしてまず、思ったこと。

……暴走族の一種じゃねーんだな……

直樹の目に飛び込んでくるもの。
大人たちが大勢集まり、馬鹿のフリをしながら水浸しになったり、
粉まみれになったりしている。
そんな様。

初めて見るそういった番組に度肝を抜かれながら、知らず知らずのうちに腹を抱えて笑っている。

やっぱり世間は
や　た　ら　と

広い！

直樹の持つ軸はへし折れないまま、何かに囲われていっているようにも見えた。

切欠　3

世の中は自分の思っているものと、何かが違うような気がする。
直樹はそんなことを考え始めた。

マンガで読んだあの、ボールを投げて打って走る野球というものを、
慶也は仲間と一緒にやってるんだよな。
ひょっとして今の僕でも両手を広げて歩いているだけで、向こうから何か引っかかってくるんじゃないか？

楽しいこと。
面白いこと。

アレやコレやと考えながら登校する直樹の背を、今日もバンッ！と叩き、
「秋月くん、おはよう！今日も大きいね！」
そう言いながら駆け抜けていく、紀子。

先日まで要注意人物だった彼女は、今は直樹の注目の的だ。

ちゃんと遊んで、勉強もして、僕とたったの5点差…。
一度、勉強の仕方を聞いてみようかな。

教室に向かいながらそう考え、先日のバレー部の見学を思い出す。

何だか分からないけど、イライラしたなー…
何だよ。

朝から起伏に忙しい直樹。

教室に入り、席に着くと、今日は自分から紀子に話しかけてみた。
「あのね、僕テレビ見たよ。『オレたちひょうきん族』」
「あ、ほんま〜。面白かったやろ？」
「うん、びっくりした」

こんな他愛のない会話をした経験など、今までなかった。
紀子の仕草一つひとつに直樹もつられ、頭を上下させている。
朝からとても、忙しい。

この日も何事もなく、直樹は全授業を受け、帰宅の途についた。
しばらく道を行くと、先の公園から数人が直樹のことをじっと見つめている。
それに気付かず前しか見ていない直樹に、その中の1人が、
「ちょっとー、秋月くん」

直樹が顔を向けると、そこには5〜6人の集団＋荷物をたくさん持たされている1人。

「ちょっとコッチへおいでやー」
その言葉を聞いた直樹は、しかし自分は彼たちに用はない、そう判断し、さっさとそこから立ち去ろうとした。

が、
「オイッ！ちょっと待てェ言うとんねん！！」
少し荒くなった声に、直樹は足を止めて振り返った。

「○○○不動産○○○建設の御曹司さん。
用事がある言うとんねん」

そう言った彼らに、直樹はピクリと反応して歩み寄る。
「……何？」
この状況がどういうものなのか、これまで人と接してきていない直樹にはイマイチよく掴めていない。
そんな直樹に、リーダー格のような男子が言った。
「あのな、秋月くん。こないだの実力テスト、1番やったんやってな。
スゴイねぇ。
僕は君が来るまで、学年でずっと2番やったんよ。
久保には勝てへんのやけどなー」
紀子の名前が出て、ニコッとする直樹。
その男子は続けて、
「何言うてるか分からへん？また2番になりたいなー言うてるんや。君、どうしたらいいか分かるやろー？」
しかし、あまり意味が分からない直樹は思った通りを口にする。
「じゃあお互い頑張ろうよ。また3ヵ月後にテストがあるじゃん。今度も負けないよ」
それを聞いた相手の彼は、明らかにイラッとした顔で叫んだ。
「誰がそんなこと言うてんねん！オマエ、アホか！！
ワザと点数落とせ言うてんのや！！」
「え？そんなことできないよ」
直樹が即答すると、その彼はフッと鼻で笑った。
「昨夜、君のお父さんがウチに来てたよ？」
それを聞き、顔つきの変わった直樹。

すると取り巻きが、
「井本くんのお父さんはね、〇〇市の〇〇長なんやで？地元の名士いうヤツや」
…コイツの名前、井本っていうのか。
直樹はその時、紀子以外の同級生の名前を初めて覚えた。
2人目だ。
「そうそう。僕のお父さんと銀行に勤めている叔父さんに、君のお父さんが頭を下げに来てたんや。昨夜ね。
今度計画中のショッピングモールの話、デパートの話。
あの仕事が君のお父さんの仕事にならないと、困るんちゃうかなー？」
直樹を見上げながら鼻でモノを言う彼に対し、直樹は完全にスイッチが入る。
「……ねぇ、ソレって談合だよね」
それを聞いた井本は、
「だんごう？」
すると周りの取り巻きたちが
「だんごうって何だ？」
とヒソヒソと話し始めた。
「君さぁ、そんなこと大きな声で、こんな所で話しちゃって平気なの？
ソレって犯罪だよ。
ウチの父を攻撃したら、間違いなく君のお父さんと叔父さんも捕まっちゃうよ？」

取り巻きの1人がカバンから辞書を取り出し、『談合』を調べている。
「ここには『相談する』としか書いてないぞ！？」
密かな声。
それを聞いた直樹、『さすがは中学生……』などと思っている。
「知らないのならいいよ。家に帰ってお父さんに言ってみな。今、君が僕に言ったことを。
相談に乗ってくれると思うよ？」
そして直樹は、カバンを背負わされている彼をチラリと見た。
「それと君さ。何でこんなことやってんの？アルバイト？時給いくら？
イジメられてやってるんだったら、今の君は相当なカスだよ。
僕は君のことを、とっても白い目で見てるから。
移るとヤだから、僕に話しかけないでね」
そう言い残し、直樹はその場からさっさと立ち去った。
直樹は心の中で拳を作る。
負けてたまるか！！
蹴落とされてたまるか！！
思春期の直樹。
それと同時に、紀子のことが頭を過ぎる。
彼女の顔を思い浮かべ、口角を少し上げながら何となく両手を広げ

て家に帰った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2369ba/

正道の系譜

2012年1月6日10時46分発行